
魔法と炎と伝説と

猿芝居

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法と炎と伝説と

【Nコード】

N1287S

【作者名】

猿芝居

【あらすじ】

ある日、目が覚めるとそこは草原、手には刀。そこで出会ったのは巨大な猪と銀髪の美少女。繰り広げられるは、バトルと友情と少しの恋。

異世界に転生した少年のお話です。現段階ではバトルと恋愛を同じぐらいの量で話を進めていこうと考えておりますが、途中で割合が変わってくる可能性があります。ご了承ください。

また、この作品には主人公チート、ハーレム、若干のエロ要素が含ま

まれています、苦手な方はご注意ください

第一話「目覚め」(前書き)

感想などいただけるとありがたいです

第一話「目覚め」

魔法。ドラゴン。勇者。そして魔王

今時、こんなベタな話もないだろう

自分に隠された能力があるんじゃないかと、いきなり精霊が現れて「僕と契約して魔法使いになってよ！」なんておもしろおかしい出来事が起きるのを期待するのはもうやめた

所詮そんなものは人間が想像した妄想の産物。現実には存在しない。そんな夢も希望もない、お話の主人公としてあるまじき思想も持った少年はその日、その考えを改めなければならなくなった

[illegible]

「あー、はいはい。これは夢ですね。分かります」

目を覚ました俺は思う

……目を覚ました夢を見ることってあるよね？

・・・だつて夢でしょ。これ。草原のと真ん中だもの！うさぎに角生えてるもの！手に日本刀っぽいもの握られているもの！

目の前に広がる黄緑色の大地と、見たことのない動物、さつきまで寝ていた自分の布団はどこへいったのか、そして刀。しかし俺は冷

静に、夢か現実かを確かめる最も有名な方法を実践してみる

「・・・痛い」

頬を軽くつねる。痛い

バキッ！！

今度は思いっきり殴ってみた。痺れるような痛みが顔面に走り、赤くなっているのだろう、その頬は熱を帯び、触つてみると少し腫れていた

「・・・いてえ」

状況判断ができない。夢だと思っていたこの世界、だが今までこんなにリアルで意識がはっきりとした夢は見たことがない、そして腫れあがった自分の頬。この事から俺はひとつの考えを導き出す

「夢じゃない・・・？」

夢じゃない、つまり自分は知らない世界に来てしまったという事だ。しかし俺が思ったのは、なぜこんなところに来てしまったのかとか、どうすれば戻れるか、ではなく

「・・・日本語通じるかな」

馬鹿だった

ゆっくりと体を起こし、腕を前に伸ばす。明らかに今まで自分が住んでいた世界とは違う、まさに異世界。普通だったら恐怖と不安で

発狂しそうだが、

「これは楽しまなきゃ損でしょ」

やっぱり馬鹿だった

俺は昔からゲームや漫画。特にファンタジー物が好きだった。中2までサンタを本気で信じていたし、魔法の訓練も毎日欠かさずしていた

良く言えば純粹、悪く言えば単純な性格で同級生からかわれる事も多かった。高校生になってからは、そういう思いは捨て、普通の高校生になろうとした、自分の身ににそんな面白い事が起きるわけがない、そう割り切って過ごしていた

「・・・あきらめきれてなかったんだな」

これはまさに神の慈悲。ファンタジーにあこがれ続けた自分へのご褒美。そういう事にしておこう。考えが纏まり、じゃあとりあえず人でも探そうかと立ち上がったその時、

ドオオオオン！！

心臓に直接響くような轟音と共に、大地が大きく揺れる

音がした方に体を向けると一キロほど先に、大きな土煙が上がっている。なにが起きているのかはよく見えないが、なんだかオラ、ワクワクすつぞ！

「俺の野次馬魂に火がつくZEE！！」

わけの分からない言葉を叫び、俺は草原を猛烈に駆けて行った

第二話「美少女と猪」（前書き）

感想などいただけるとありがたいです

第二話「美少女と猪」

土煙が近づくにつれ、俺は一つの疑問を抱く

「あれ？俺ってこんな足速かったっけ？」

一キロは離れていたであろう場所、そこから走り出してからまだ二十秒ほどしか経っていない。しかし、もう土煙の上がっていた場所はすぐ目の前だ。つまりは一キロを二十秒で走ったことになる。全力で走っていないのに、だ。ボルトもびっくりである

「・・・はっはゝん。これが噂に聞くチート能力というわけですね」

転生した者に特殊な力を与える。すなわちチート、転生物ではお決まりのパターンだ、もしかとは思っていたが、本当にあるのが分かれるとニヤついてしまう

ブオオオオオオオオン！！

土煙の中からなにかの雄たけびが響き、俺は現実に戻される。そして、土埃の中から3メートルは優に超えているであろう、巨大な猪が現れた

「つぐ・・・はあはあ・・・」

銀髪ロングの美少女といっしょに。

「・・・！？危ない！逃げて！！」

美少女は俺に気付くと、驚いたような表情を見せるがすぐに俺へ逃げよう諭した

「らじゃ」

「!？」

俺のあまりにもあつけない返事に少女は嫌悪感を抱いたようだった。だって仕方ないじゃない。俺の全神経が危険だと告げているんだもの

「ちょ、ちよと、ごめんやつぱり待って！助けて！女の子一人置いて逃げるの！？俺に任せろ！！とかないの！？」

逃げてって言ったのはそっちだろうが・・・

「残念だったな。野次馬つてのは見るのが専門なんだよ」

「なによ、そr・・・きゃあああああああ」

即座に厄介事だと判断し、踵を返そうとすると、少女が悲鳴を上げる。巨大猪が吐き出した息によって吹き飛ばされたのだ、少女は勢いよく近くの岩にぶつかり、そのままたれかかるように倒れこむ。生きてはいるようだが、あちこちから血が出ている。さすがに怪我をした女の子を見捨てる気にはなれず、変わりかけていた体の向きを元に戻し、巨大猪と向き合う。

仕方ないな。

「やいやい、デカブツ！女の子の暴力をふるうなんて最低だぞ！！」

待ってるゝ今、俺のスーパー強くてかつこいいパンチをお見舞いし
t・・・ごふっ・・・」

まだセリフの途中だったのに、突進で吹っ飛ばされた

・・・あーあだから野次馬って言ったじゃん

薄れていく意識の中、最後に俺は思った

・・・日本語。通じたな・・・

第三話「神様」(前書き)

感想などいただけるとありがたいです

第三話「神様」

「二度目の死を迎えようとしている君に生き残るチャンスをあげよう　！！」

「・・・だれだオマエ」

何もない白い空間、そこに存在するのは俺と目の前に立っているイケメン（羽付き）。

「む、オマエとは失礼な、私は神様だぞ？」

「・・・・・・・・・・」

「ん？信じてない？」

「構わん続ける」

「・・・神様にその態度はないんじゃない？」

すると自称神様は俺に対し、一瞬不満そうな目を向けるが、すぐ思い出したように話出した

「そういえば君、自分がなんでここにるか知ってる？」

「・・・転生したとかじゃないの？」

「そう！その通り。察しがいいじゃないかあ　因みに向こうの世界で君は死んでるから、元の世界に戻る方法とかは考える必要ないよ

」

楽しそうにすごいことをカミングアウトしてきやがった。

「・・・なんて？」

「いや、君が寝てる間に震度3の地震が起きてね、なぜか君の部屋の屋根が崩れちゃって、死んじゃった？」

「なんということでしょう・・・。」

震度3？そんな・・・そんなかつこ悪い死に方したのか・・・俺は・・・。

「まさか震度3で崩れるなんて思わなかったから、予想外でさ・・・。まだ君の寿命は随分残っていたからね、こっちで残りの人生を過ごしてもらおうと思ったわけだよ」

「・・・」

「では、本題に入ろうか。今君は死を迎えようとしている、あと二、三発、突進でもくらったらお終いだね」

無意識にさつき猪とぶつかった所をさすってしまう

「・・・どうしろと？」

「さつき走ってみて気付いたと思うけど、君にはチート能力が秘められている。これは間違って殺してしまった事のお詫びね」

ん？ちよつとおかしい所があるぞ？

「秘められている？」

「そう、備えられているじゃなくて、秘められている。いきなり莫大な力を手に入れたら君の体が持たないからね。訓練すれば少しずつ使えるようになる」

なるほど。良く出来ている

淡々と話す神様（自称）によって自分の神様のイメージが崩れていくのを感じながら、さらに疑問をぶつける

「・・・して、その能力とは？」

個人的には好きな武器を創造できるとかがいいんだが

「実はまだ属性を決めてないんだよね。なにがいい？」

ほう。属性と来たか

「属性？ならばハーレム・・・」

「じゃあ炎ね」

あー・・・聞く気はないと

「・・・うん。じゃあ設定完了！これで君は炎を自在に操る事が出来るようになった。うまく使えばあの猪も倒せるだろう。じゃまたね」

神様（自称）がセリフを言い終わると同時に床が真っ黒になり、体をジェットコースターが急降下した時の様な感覚が襲う

「え、ちょ・・・うわああああああ」

どさっ

草原の上に落ちる。目の前ではさっきの神様（自称）なんかよりよっぽど強そうな猪が鼻息を荒げてこちらを睨んでいた

「・・・能力の使い方聞くの忘れた」

第三話「神様」（後書き）

こんなときに不謹慎な死に方をさせてしまいました。
ほかによいものか思いつかなかったので・・・
ご気分を悪くされた方申し訳ありません。

第四話「初めての戦闘」(前書き)

感想などいただけるとありがたいです

第四話「初めての戦闘」

神様（自称）が言うには、俺は炎が使えるようになったらしい。でも

「・・・どうすれば使えるんだろう」

使い方が分からない。呪文とか必要なのか？そう思い、試しに知っている炎の呪文を唱えてみる

「メー！」「ファイー！」

付き出した右手には何も起きず、ただ空しく自分の声が響いただけだった。ですよねー。しかも心なしか猪の顔が険しくなった気がする。まずい。さっきの美少女はまだのびてるし、隠れようにも、ここ見渡す限り草原だ。

「・・・万事休すか」

二度目の死を迎える恐怖。現世での死は痛みも何もなかったが、今回ばかりと激しい痛みが襲うだろう。なにも出来ない自分に悔しさがかみ上げ、右手の刀を握り締める。

・・・刀？

「これで戦えるんじゃない？」

転生時より自分の手に握られていた刀。

左手に鞘を持ち、右手で、滑らかに湾曲したそれを抜き放つ。その刀身は鈍く光り、素人目でも良い刀だと分かる。

「……………」

思わず見とれてしまう

長年、中二病患者だった俺にとって目の前のそれは、どんな宝石よりも美しく見えた

ドドドドドドドドド

しかし相手は待ってくれない。呆けている俺に向かって突進してくる

スパッ

俺は、その攻撃にすばやく反応し、巨大猪の右牙に向かって斬撃を放つ。

その滑らかな切断面から刀の切れ味が良く分かる。まるで豆腐を切ったようにあっさりと、刃は猪の牙を切り落とす

「すげえ……………」

不意打ちだったにも関わらず、すぐに反撃に転じたことではない。刀の切れ味に対しての言葉だ

ブオオオアアアアアアアア！！

牙を切り落とされた猪が怒りの声を上げる。しかし巨大な牙が片方無くなった為、上手くバランスが取れず、酔っ払いのように千鳥足になっている

そこで、俺はもう一度、自分の能力とやらを試してみる。目を瞑り、刀を両手で体の前に構える。今度は刀に炎を纏うイメージ。頭の中

でイメージを膨らませていくと、体中が熱くなり、血流が早くなつたように感じる。その熱を両手に集中させ、刀に這うようにして放出する

「出来た・・・」

俺の握った刀には澄んだオレンジ色をした炎を纏っていた。ゆらりと光るそれは、神秘的で、俺の心を引き付けた。すぐさま刀を構え、まだ足元がおぼつかない猪に斬りかかる。

ブルアアアアアアアアアアアア！！

猪が悲鳴を上げる。切り裂いた皮膚は燃え上がり、大量の血を噴き出している。しばらく苦しそうなうめき声をあげていたが、しばらくすると猪は倒れて動かなくなった
初勝利と自分のチート能力の強さに酔いしれていると、腰のあたりにタツクルをくらった

「大丈夫ですか！？怪我とかしてませんか？」

銀髪美少女のタツクルをまともに喰らった俺は、彼女に馬乗りされるような形で草原の上に倒れこんだ

「あ、ありがとうございます。助けていただいて・・・」

「わ、分かったから降りて・・・」

自分が今どんな体勢になっているのかに気付くと、少女は頬を染めながら、ごめんなさい。と早口で言うつと急いで俺から離れた。先程、血が出ていた所からは血はおろか、傷さえ見あたらなかった。治癒

の魔法でも使ったのだろうか、そんなものがあるかどうかは知らないが

「本当にありがとうございます！あ、私、レイナ・レディクルと言います。あなたは？」

少女が、まだ頬を染めたまま、自己紹介をしてきた。名乗られたらこちらにも名乗るのが礼儀というものである。一瞬偽名を使おうかとも思ったが、あくまでこれは現世の続き、親に貰った名前を変えるのもどうかと思い、俺は元の世界で使っていた名前を口にする

「俺は、成瀬 悠だ」

これが後に伝説と語り継がれるようになった話の始まりだった

第四話「初めての戦闘」(後書き)

四話目にしてやっと主人公の名前が出てきました
決して考えていなかったわけでは(r y

毎日一話ずつ更新していこうと思いますが、ストックの関係上
更新出来ない日があるかもしれません。ご了承ください

第五話「結婚」(前書き)

感想などいただけるとありがたいです

第五話「結婚」

「ナルセユウ？・・・ユウ・・・ユウですね！？」

俺の名前を聞き、レイナは満面の笑みを浮かべる。

レイナは見た目、俺とほとんど変わらない、16〜18歳くらいだろう。しかし、その高めのソプラノボイスと、少し頼りない胸からもう少し幼く見えるかもしれない、身長は俺より20センチ程低く見えるから160センチくらいだろうか、毛先まで真っすぐに伸びた銀色の髪は、腰の長さまであり、百人が百人振り返るであろう美少女だった

「あ、あの・・・」

申し訳なさそうにレイナが上目づかいでこちらを見つめる。近くで見ると余計かわいい

「さっき使っていたのって、炎の魔法ですよね？」

「うむ、その通りだ。何か問題でも？」

自慢げに胸を張る。貰いものだけだね！

しかしすぐに気付く、なぜレイナはそんなことを聞いてきたのだろうか。もしかしたらこの世界で、炎の魔法は禁止されていたりするのかもしれない。それはまずい。すぐに弁解の言葉を述べようとするがレイナが先に口を開く

「いえ、・・・炎の魔法というのは本来、神々の魔法でして、人間が使えるものでは・・・って、これ一般常識ですよ？」

オーマイガッ、禁止されてるなんてレベルじゃなかった。神様のやつ・・・面倒な能力にしゃがってえ・・・。うーん・・・仕方ない

「えっと・・・実は俺、記憶喪失なんだ。だから自分がなんで炎を使えるかも分からなくて・・・」

嘘を付くのは少々心苦しいが、この方がこれから何かと都合がいだらう

「え・・・そうだったんですか・・・すみません、変なこと言って・・・」

自分の言った事を反省するように、レイナが少し俯く。
まあこれで町とかまで連れて行ってもらえれば・・・

「分かりました！！これから一生私が面倒見ます！！」

「ありがとう。じゃあとりあえず町まで連れて・・・ん？一生？」

一生ってなんだ。面倒見ますってなんだ

「はい！！結婚しましょう！！」

・・・ええええええええええええええええ！！

までまでまで、今、会ったばかりだよ？どういうこと？

「え、・・・結婚？」

もしかしたら聞き間違いかもしれない、決闘とかの。いやそれはそ

れでイヤだけど

「・・・結婚も忘れてしまったんですか？結婚っていうのは・・・こういうことですよ」

俺の唇に柔らかいものが触れる
細く滑らかな指が俺の髪を撫で、銀色の髪から、いい匂いが鼻をくすぐる

レイナにキスをされた

「ん！！んんんん」

いきなりの出来事に訳が分からなくなり、口を塞がれたまま叫び声を上げる

「ん、はふ・・・んん・・・」

そのままレイナは舌を差し込み、俺の口の中をかき回す。俺は状況把握の為、一旦離れようとするが、レイナの腕が俺の首をしっかりとホルドしていて離れない

「はぁ・・・はむ、ん・・・」

レイナの口から終始あふれる吐息と、頬の染まった顔は俺の男としての本性を呼び起こしそうになるが、なんとか理性を保ったまま、レイナが行為をやめるのを待つ

「・・・ん、はぁ・・・結婚・・・してくれませんか？」

やっと離れてくれたレイナは頬が赤くそまり、目が虚ろになっている。

うつとりとした目と、甘く放たれた言葉から俺は

「…………はい」

思わずそう答えてしまった

第六話「高鳴り」(前書き)

レイナ視点です

第六話「高鳴り」

「ぐっ・・・きゃあああ」

私は焦っていた、同年代の仲間たちがDランクに昇格していく中、自分はEランク。しかもまだ一人でクエストも受けた事も無い。このままでは自分だけ取り残されてしまう、そう思い、私は、これが一人で達成出来れば一人前と言われる『ビッグボアー討伐』の依頼を受ける事にした。

ブヌオオオオオオオオオオオオオオ！！

結果、歯が立たず防戦一方である。このまま戦っていたらいずれ魔力が切れ、殺されてしまうだろう。自分の死を悟り、死ぬ前にパフエをお腹いっぱい食べたかったとか考えていると、ビッグボアーが前足を振り上げ、私を踏みつぶそうとしてきた

「いやあああああああああ！！」

ドオオオオオオオオオン

地震が起きたように大地が揺れ、土煙が舞い上がる

「ごほっごほっ」

辺りが砂で埋もれ、視界が悪く、呼吸が困難になる。目が痛い。相手がどこにいるかも分からない、このままではこちらが不利だ。急いでここから出ようと走り出す、しばらく走ると土煙が途切れ、視界が一気に広がった、と同時に見たのはボーっとこちらを見てい

る、黒髪の少年だった

「・・・！？危ない！逃げて！！」

彼の存在に驚き、一瞬動きが止まるが、すぐに関係の無い人間を巻き込まないため、少年に逃げるよう諭す

「らじゃ」

「！？」

彼のあまりにもあつけない返事に私は少し嫌悪感を抱いた。少し迷ったりしないものか、しかし、彼が刀を握っているのに気付き、先程の言葉を改める

「ちょ、ちょっと、ごめんやっぱり待って！助けて！女の子一人置いて逃げるの！？俺に任せろ！！とかないの！？」

刀を持っているという事はソルジャーかもしれない、ギルドマークらしきものは見当たらないが、ソルジャーだと仮定し、私は助けを求めた

「残念だったな。野次馬つてのは見るのが専門なんだよ」

「なによ、そり・・・きゃああああああ」

彼の言葉に異議を唱えようとするが、突風が私の体を浮かせ、吹き飛ばす。そのまま私の体は岩に叩きつけられ、血が流れ出す。意識が遠のく・・・

「・・・えっ!？」

目を覚ますと、信じられない光景が広がっていた。少年がビッグボアの牙を切り落としていたのだ。ビッグボアの牙は硬いことで有名で、武器として使われる事があるが、硬すぎる為、加工が困難で一つ作るのに5年はかかると言われている。また、加工のためには莫大な費用がかかり、ビッグボアの牙を使った武器を持っている者は一流と言われる人間ばかりだ

しかし、彼はあっさりとその牙を切り落とし、なおかつ刀は傷一つ付いていなかった

「かつこいい・・・」

純粹にそう思った。自分の体に回復呪文をかけ、ゆっくりと立ち上がる

すると、また驚くべきことが起こった。彼の刀が炎を帯び、ビッグボアの体を引き裂き、その巨体は崩れ落ちた。炎は本来神々の魔法のはずだ。なぜ彼が・・・しかし私は、考えるよりも先に彼に駆けよっていった

「・・・ごふっ!！」

抱きついた時、彼が小さなうめき声を上げた気がするが、気のせいだろう

近くで見たユウ（今、名前を聞いた）はイケメンとは言えないが、整った顔立ちをしており、どこか不思議な、人を引き付ける雰囲気を持った人だった

彼は今、記憶を失くしているらしい。そのことに、どうしようもない母性本能と、先程の戦闘から、この人を守って貰いたいという、正反対な思いが交差する

私は彼の黒い瞳から目が離せなくなった

もしかしたらこれを一目ぼれと呼ぶのかもしれない。

私は今まで感じた事のない自分の胸の高鳴りに驚愕する。

たくさん男性に落とし文句と呼ばれるものを散々言われてきたが、こんな気持ちは初めてだった

そして、私は自分でも信じられない事を口走る

「はい！！結婚しましょう！！」

第六話「高鳴り」（後書き）

思いつきで書きました。ストーリーにはあまり関係ありません

よろしければ評価、感想お願いします

お知らせ

一度、自分の話を読み返してみて

背景設定をすっかりしていなかった。主人公のキャラが安定しない。などの理由から一時、「魔法と炎と伝説と」を休載させていただき
ます

お気に入り登録していただいた方ありがとうございます。そして申し訳ありません

ストックとして、もう一話分ございますのでそちらを明日、投稿して休載いたします

また、これとは関係ない、別の物語を現在作成中です。

まだ投稿はしておりませんが、そちらも読んでくださるとうれしいです

大変勝手なことではありますが、ご了承ください

これからも川原洋介をよろしく願っています

第七話「町」

「うん」

隣でレイナがうれしそうに鼻歌を歌っている。

「どうやら結婚（？）することになってしまった俺は、現在、町に向かって歩いてるところだ。この美少女、どうやら俺に一目ぼれしたらしく、いきなり俺はファーストキスを奪われてしまった、（向こうも初めてだったらしいが）まあ、こんな可愛い子だったらそれ以上の事でも別に・げふんげふん」

「レイナ。これから行く町ってどんなところなんだ？」

「まだ若干混乱気味だったが、一応自分の目的地ぐらいは確認しておかないとな」

「デルターニア王国だよ。通称デルタ、剣勇者アルバス様の治める土地」

俺との会話に慣れ、少し口調が柔らかくなったレイナが上機嫌のまま答える

「剣勇者？」

「うん。この世界には、七騎士と呼ばれる七人の最強の戦士たちがいてね、その人たちのおかげでもう百年近く戦争が起きていないの！ 剣勇者アルバス様っていうのはその中の一人ね」

なるほどね、力が正義の世界なのか。王国という事はまだ君主制が

実施されているのだろう。俺の居た世界より、文明は少し遅れているのだ

「そうだ、デルタに着いたら私のギルドに連れて行ってあげるよ！
」

そう、そしてこの世界にはギルドというものがあるらしい。ギルドとは一般人、貴族、政治家、様々な種類の人間から依頼を受け、それをこなしていく組織だ。稀に国からも依頼がくることもあるらしい。

レイナが属しているのはその内の一つ、「ブルーウイング」その名の通り青い翼をモチーフにしたギルドマークを掲げている。ギルドメンバーは体のどこかにギルドマークを記すことが義務付けられており、見ればどこのギルドメンバーかがすぐ分かるようになってい（因みにレイナは内股にあるらしい）

「あ、デルタの町が見えてきたよ！！」

しばらく話していると、デルタに付いたようだ。

町と呼ばれたそれは、周りに高さ百メートルほどの壁を築き、入口の門は堅く閉ざされ、何かの侵入を拒むかのように建てられていた。まるで要塞だ

そして中心には、巨大な城が聳え立っている

「・・・どうしたの？」

あんな城みたいの、某ネズミのマスコットの国でしか・・・ごほん
漫画やアニメでしか見たことがなかったものが、今、目の前にある。
その事に感動し、呆けている俺に気付いたレイナが、下から覗き込んできた

「・・・いや、なんでもない。」

なぜかテンションが上がっている俺を、レイナは不思議そうな目で見ていたが、ふと思い出したように話した

「そうそう、ユウ？式はいつにする？」

「は？式？」

「結・婚・式！」

・・・忘れてた。ついさっき俺はこの美少女に求婚され、承諾してしまったのだ。しかし式だと？その前にはいろいろとやる必要があるだろう！！いろいろと！！・・・親にあいさつとか。別に変なこととは考えてないぞ？断じて。

「待とうかレイナ、俺達はまだ若い、そんなに焦る事はないんじゃないか？」

そう、まずはお友達から・・・

「・・・そうね、式を挙げようにも準備が必要だし、じゃあ、一緒に生活することから始めましょ。」

同棲から！？

第七話「町」（後書き）

この話をもって一時休載とさせていただきます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1287s/>

魔法と炎と伝説と

2011年8月23日14時45分発行